東京キングダムセミナー②20221112

この前は 10/1 でしたね。どうしても、創世記の所から話したくなって、話しましたが、途中までになってしまったので、今日はその続きを話したいと思います。そして、我々みんなで、それを消化したい。そして、それが少しずつでも、自分の血となり肉となっていく者となりたいと思います。

前回、創世記の初めのヘブライ語のコピーを配りましたよね。前回いらっしゃった方は、貰っていると思いますが・・・ヘブライ語、・・・大変なことですよね。でもね、そんなに難しく思わないで下さい。持っていない方は、前回の残りをあげますよ。「ベレシート」と書いてあるものを配りますね。折角、残りがあるので、見ながら進めましょう。ラインで聞かれている方は、手元にミルトス社から出ている対訳の創世記を見て下さい。無い方は構いませんよ。

私が、皆さんに創世記を開いて貰って、「まず、何が言いたいか」と言うと、それは、「この難しいヘブライ語を勉強してくれ」って、言っているんじゃないんです。覚えなくていいですから。そんなの。・・・でも覚えたい人は、どうぞやって下さい。現にやっていらっしゃる方が、何人もいらっしゃっているみたいなんですけどね。この前も、重々言いましたけれども、初めからこういうふうに書かれた聖書があったわけではないんです。誰かが、一生懸命机に向かって書いて、「出来たよー」と言って、製本して、そして、配ったわけじゃないんです。書いたものを印刷できるような時代じゃあないから、みんな口で覚えて、そして、口で伝えていったわけです。だから、皆さん、初め、「聖書の言葉」というのは、耳で聞いたんです。ただ、耳で聞く、誰かが言ってくれる、自分の心の中にそれを飲み込む、そしてまた、自分が誰かに口ずさんで伝えるんです。それが、「聖書の言葉」だったんです。

私たちが「創世記」と言って聖書を開いたとき、ザーっと印刷で書いてあるから、「〇〇の誰かが何をした」といって、ザーっと書いてあるものを、我々は小説を読むように、文章を、なんかそういうふうに読んでいってしまうところがあるわけなんです。今みたいに何章何節と言って、ページを開いて…と、そういうもんじゃなかったわけでしょ。だから、小説を読むように読んでいってしまうと、大切なメッセージを感じ取らずに進んでいってしまうんです。・・・そこからミスったら、後もミスるから、ここ、とっても大事なんです。

実際、我々が今、聖書をぱっと開いて、創世記１章を見開くと・・・そこに、**「神様が、あなたを招いている世界」があるんです。あなたを招待している世界がもう、そこに存在しているんです。そこが神様とあなたとの世界、そういう世界なんです。**その世界というものは、**『主とあなた自身との一対一の対面』であり、『主のワールド』の中にあなたが居るわけなんです。そこに「あなたのどんな世界があるか」っていうことなんです。**

だけど、印刷で書いてあるものをさーっと小説を読むように、「あぁ、世界の初めって、こうだったのね」、1 日目こうこうね、2 日目こうね。3 日目こうね、なるほどね」って言って、7 日間めぐって、それで、「あぁ、世界の初めはこういうふうにできていたのね。」と、頭で理解してそれで完了。終わってしまうわけです。ですから、「初めに神が、天と地を創造した」と書いてあるだけで、「この中に、まだ人間はいないじゃないの」って、それしか見えないんです。「そう、書いてある」と、言うんです。それが、理科、科学的な目だということなんです。そうじゃないんです。「初めに神が創造した」と語り始めた時に、**もうそこに、神とあなたが居るわけです。聞き手は、「あなた」なのよ。私たち自身が、その神が、語っておられる「聞き手」なんです。**

だからこの前、節をつけて読み上げましたけれど、あのようにゆったりと、一言、一言、感じ取るように読むわけ。それを翻訳しちゃったら、どこの国の言葉でも、ツラーっと、読めてしまうでしょう。(だからと言って、言語を覚える必要はないけれど、)翻訳したから「この通りだよ」って言ったんじゃあ、足りないわけ。そういうもんだということを、知っている人は、これを伝えないといけないんです。絶対。今の時代、「神の国」が現れようとする今の時代に。それが分かるか分からないかで、聖書の読み方が全然変わって来るし、分かり方も違うから、わざわざこんなことを、このセミナーの中で言っているんです。「キングダムセミナー」という本をやるのが「キングダムセミナー」なんだけど、その前置きの前置きを、今、ここで言っているわけです。それがとっても「大切だ」ということが、ラインセミナーをやっていて分かって来たから、伝えたいわけです。それもこれを対面で、伝いたいと思うわけなんです。

そういう神様のワールドなんです。ですから、・・・「ベレシート　バラー　エろヒーム　エット　ハシャマイム　ヴェエット　ハアレツ」(先生朗誦)、皆さん、この前も読みましたが、ちょっと口に出して読んでみましょう。(みんなで朗誦)「ベレシート　バラー　エろヒーム　エット　ハシャマイム　ヴェエット　ハアレツ」、もう１回、歌ってみる？　すごいいねー、このセミナー。(みんなで２回目歌う)「ベレシート　バラー　エろヒーム　エット　ハシャマイム　ヴェエット　ハアレツ」、ハレルヤ、凄ーい！なかなか歌えませんよ。あのね、他国の言葉で、「なんのこっちゃ」と思うでしょう。でもね、もう分かったでしょ。日本語で書いてあるから、「ベレシート」は、「初めに」「バラー　エろヒーム」は「創造した　神は」・・・１章の１節は簡単だから、これを、もう見ないでも、「ベレシート　バラー　エろヒーム」と言えるように。

あなたの口を通して、あなたの内側に主がおられて、主がその言葉を、溢れんばかりに、発しておられるんです。・・・そういうつもりで言えるように。ただ、ついでに言うと、昔むかしの「何これ、難しい」っていう中学の英語のそういう「習い性」で読まないことです。わかる？赤ちゃんが、わけが分かんないけど、パパ、ママのことを、「パ　パ、　マ　マ」って言っているでしょう。あれでいいんです。**そのつもりになって、発して味わってみることです。**そうしたら、**神様の息づかいが分かってきます。**　単に日本語で読むと、「初めに、神は、天と地を創造した。」・・・と、頭の中に入るだけでしょ。でも、**主が歌ったとおりに、心の世界で、自分も内でそれを発したら、私たちが、主体になるんです。**たぶん、やってみるよ。私が言うから、後をついて言ってみて。

(みんなで歌う)「ベレシート　バラー　エろヒーム　エット　ハシャマイム　ヴェエット　ハアレツ」。そうそう、そのゆっくり差加減を味わいながら、読むの。だから、「はじめにー、神は、創造したー」日本語で、節つけて、歌ってもいい。ね、この**ゆっくりさ加減の中に、神は私たちを抱き込んで下さっているんです。頭で読むんじゃないんです。我々は、魂と霊で読むんです。**

そうすると、その２節なんかも、「ヴェハアレツ　ハイター　トフー　ヴェヴォフ　ヴェほシェふ　アる　ベネー　テホム」(先生朗誦)なんか、怖いような、神秘的な単語が出て来るんです。**「ヴェルアは　エろヒーム」神の霊**が、**「メラヘフェト」飛び回っていた。「アる　ベネー　ハマイム」水の面を**・・・というこの情景が、自分の胸にあふれて来るように、魂と霊で読んで下さいね。

それから、皆さん、特に創世記を読む時、「動詞」に注意してください。いろんな動詞が出て来ます。神様の「行為」です。神様の「動き」です。そういうのがでてきたら、要注意なんです。日本語の聖書で読む時に、「名詞」もそうだけど、「動詞」に注目してください。それと、続けて何回も出てくる言葉、何回も出て来るフレーズ、そういうものがあったら要注意なんです。

この太古の昔のこの言い方は、我々が、物語や小説やそういうものの書き方とは違うんです。例えば、今だったら、もっと詳しい修飾語をつけていっぱい書くでしょ。今の脚本家だったら、そうじゃないですか。こんな単純に書きませんよ。「天はこうであった・・・・まばゆい光であった」とか、「深淵と言ったって、ほんとに深い闇で、何かドロドロしていて・・・、」って、いっぱい脚本家はつけるはずです。けれども、ここ創世記では、簡素な言葉で書くんです。それゆえに、繰り返えし、繰り返し出てくる言葉とか、繰り返して言うフレーズは、よっぽど、何かが、込められているんです。

「歌で歌っているのは、なんでか」というと、そこにいろんな強調を込めたいからです。いろんな感情、感じ、息づかいが込められているからです。ですから、ここを普通に読んだら、「地は、形なく空しく、そしてやみの上に神の霊が飛び回っていました。」ただ、これだけねと、おもうかもしれないけれど、（ヘブライ語をやっている方は、分かると思いますが）・・・その３行目に、「飛び回っていた」という単語がありますが、・・・「飛び回っている」というのは、名詞ですか、動詞ですか？動詞ですよね。飛び回るんだから、動詞ですよね。じゃあ、そこを普通の「飛び回る」という動詞にすればいいのに、普通の動詞じゃなくて、分詞を使っているんです。（対訳の本）単語の下に、これを見たら文法が分かんなくても大丈夫なように、「ピ分女単」と品種の分析が書いてあるんです。これね、ピエール系の分詞だと書いてあるんです。

何で、普通の動詞じゃなくて、分詞を使うのか、それは、ここにも話し手の「強調」が込められているんです。分詞というのは、主に現在形なんです。「いつの話だよ。太古の昔に、なんで現在形使うんだよ」と、言いたいところですけど、「あなたの腹の中にあるやみの上に神の霊が飛び回っていますよ。読み手さんよ。聞き手さんよ。」あなたの腹の中に、深い闇が横たわっていても、その上に親鳥が羽をパタパタッと広げて、雛鳥に向かって、「さぁ、飛び立てよ、飛び立てよ、早く」と言って、急かして、駆り立てているように、飛び回って、いましたよ。」と過去形で言いたいんじゃなくて、「今も飛び回っていますよ。読み手さんよ。」と現在形で語られているのが、「それが分かるか」と語られているんです。あなたが読んでいるのが、紀元前なのか、紀元後なのか、何世紀なのか、今なのか知りませんけど、読んだその時に、そういう時に、飛び回っているんだよ。」と、「それが分かるか」と語られているんです。

少なくとも、この言葉を聞くあなたは、あなたの中に、神は、もう、触れておられて、・・・だから、聞いているんでしょう。その中に、何か分からないけれど、渾沌としていて、何がもやもやっとしているのか分かんないんです。・・・だけど、「神の霊が、あなたの上に、腹の深みに来て、パタパタパターと、急き立てて、駆り立てて、その動作を大きく、繰り返しています」と。この２節を読んだだけで、「ドキドキしてくる。・・・ああ、そうなんだ！」という、この神の世界。水の表を飛び回っていた、・・・この神の世界。

「『光あれ』と、神は言った。」と書いてあるけれど、その前に・・・パタパタと親鳥がやっている姿が、すでにあるわけです。で、「何か分かんない、何か分かんない」と、「わたしの中に何かが始まっている。」「何かが、自分の中に起こっている」「でも、何かわからないんだけど、モヤモヤしているこのモヤモヤ感」、・・・分かりますか？あるでしょ。何かわかんないんです。今は

まだ、ハッキリしないんです。でもそこに、神が、ハッキリ、ことばを持って「**光をあれ！**」と言われるわけです。で、「**そこに、光があった**」と。**我々がもやもやして、何かわかんない、その中に、神が御言葉を、バシッと、語られる時が来る。語られる時が、必ず来る。それによって、私たちは、一歩、目が開かれて、進めるようになる。**それがこの第 1 日目の初めにあるんです。

ところが皆さん、残念なことに、多くの場合この次に注目するんです。聞いたことのある人は多いと思いますけれど、・・・『光あれ』と、「神は言った」と、言うけれど、「**ベレシート　バラー　エロヒーム**」**初めに神が、天と地を創造した**というのに、2 節、「**その地は形がなかった**」「**空しかった。**」「**やみがあった**」って、「何よ、これ」って。・・・多くの場合、ここに注目するんです。そこなんです。

いいですか、「**神様が造った**」というこの考え方が、2 通りあるんです。1 つは、1 章 1 節が、単なる天地創造の「**表題**」であるという考え方です。物語の「**題名**」であるという考え方です。「鎌倉殿の 13 人」という、表題であるとね。(笑) もう一つは、2 節からは、「**実際の描写**」であるという考え方です。つまり、「初めに神が天と地を創造した」と言うんだったら、神が、想像したんでしょう。・・・ならば、地は形なく空しかったんです。だったら、「**この落差はなんなのよ。**」**という、ここに目を留める解釈の仕方、考えです。**これが、太古の昔から、ずーっと、糾弾されていた 2 通りの考え方なんです。どっちを取ってもいいんですよ。あなた次第です。だけど、ここで、「**エット　ハシャマイム　ヴェエット　ハアレツ　天と地を創造した　形なく空しかった**」という、この「ストーリー」の中に、・・・ここの所だけでは、分からないけれど、後々、旧約の「モーセ五書」「歴史書」「預言書」「詩書」をずーっと読んでいって、そして新約も読んでいったら、「**あ、もしかしたら**」**って、分かるところがあるんです。それが分かって来たというのが、大きなことなんです。**

皆さん、ご存じ知ですよね。**ヨブ記の 38 章。**昔から、「このヨブ記は、いつの時代の物語だろうか」と言って、探求されているところなんです。それで、ヨブ記っていうのは、「案外、早い時代であったであろう」と、言われているんです。・・・38 章の 1 節「**主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。**」(神様が言っておられるんですよ。) **2 節「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこのものは誰か。3 節　さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。4 節　わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。5 節　あなたは知っているか。誰がその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。そのとき、明の星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。」**・・・と、続くわけです。つまり、ヨブに対して、「偉そうに言うけど、お前は初めのことを知っているのか？この地の基を据えられた時、明けの星々がともに喜び歌い・・・」と書いてある。

ここでは、「明けの星々」とは、「何のこっちゃ」ですが、後々、預言書とか、新約聖書の中で明らかになっていくんです。**神様が秘密を明らかにしておられるわけです。**イザヤ書の 14 章 12 節「**暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。13 節あなたは心の中で言った。『私は天に昇ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山に座ろう。14 節蜜雲の頂きに上り、いと高き方のようになろう。』15 節しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。**」・・・

これって、何のことですか？　ここのところをよく読んだら、バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌われたと書いてありますが、ここは、単に「バビロンの王」について言っているんじゃないんです。この預言の言葉の内容は、単なる、「地上の国の王」のことを言っているのではなくて、ここでいっている内容には、「**預言の妙**」があるんです。**聖書の預言というのは、ある一つのことを言っていながら、そこに、もう一つ、もう二つの、何重もの意味を抱え込んでいるんです。これを「預言の多重性」**というんです。そういうもんなんです。ですから、一つの事を言ってるから、それは、**1つのことだけ**というふうに受け取ってもいいんだけれど、聖書の預言は、そのことを言いながら、もっと別の深いことを言っているんです。**もっと、前の時代、あるいは後々の時代のことを言っている。**そういうものなんです。

いいですか。私たちが秋の景色を眺めたとして・・・、東京では無理かもしれないけれど、ちょっと地方に行くと、紅葉した山々があるじゃない。でもその紅葉した山々の向こうに、青い山が見えるじゃない。そのもっと向こうに雪をかぶった山が見えるじゃないですか。つまり、こう、こう、こう、何重にもなっているわけなんです。で、見ている方は、一つの山を見ているんだけど、でも一つの山を見ているだけじゃない。「山」っていう山を見ているけれど、何重もの向こうの距離の「遠いい山」を見ているわけですよ。これが、「**表現の多重性**」というわけですよ。

だから、創世記の初めに、1章と2節の間に何があったかと言い始めると・・・、「そうだ、この中に「明けの明星」、これを「ルシファー」と言いますが、**サタンの元の名前、神の位に立とうとした「明けの明星」がね、天から落とされたということが、そこに「暗示されていますよ」というふうに読める**んだけども、・・・確かにそうかもしれない、そうなんだとして、「じゃあ、なんで、1節と2節の間に、そういうことがあったって、書かないんですか」という、疑問が湧いて来るわけです。

聖書はね、書いてある事に意味があるんです。そして、書かないことにも意味があるんです。そこなんです。書かないことにも意味があるんです。**何故、書いてないか**というと、さっき言いましたよね。**あなたと神様の世界なんです。神の世界の中にあなたが居て、神様は何を望んだかというと、神ご自身、わたしとあなたの世界を望んでおられるんです。そして、わたしとあなたが神様と向かい合って、創るワールド、二人の世界。その二人の世界を望んでおられる。それを、望んでおられる。そして、それを築こうとしておられる。それを一言でいうと、それが、『神の国』なんです。**

「神の国」なんです。だから、**「二人の世界」だから、サタンの存在は、いらない**でしょ。いや、いるんだけど、・・・確かにやみがあり、確かに邪魔があるんだけれど、**神様は、敢えてここで、書いていないんです。ハッキリと書かないで、後々の預言者に任せているんです。**だから、旧約聖書の間は、どっちかというと、ハッキリ、サタンのことを書いてないでしょ。イザヤ書だって、「明けの明星」うんぬんと言ってるだけ、ヨブ記だって、そういう感じです。

でも、・・・**ハッキリ、サタンを糾弾し始めたのは、新約からなんです。**ですから、その新約のところまで、**ずーっと、引き伸ばしている**。だから、人間が、神様に背いて、サタンの虜になって、自分にいろんな災難が降りかかってくる。イスラエルの国が滅びていく・・・でしょ。

それを神様は、旧約聖書でどう書いたか。神様が惑わした、神様が病気にした、神様が滅ぼし

た・・・そうなるじゃないですか。神様が呪いを持って来たんです。で、神様が、祝福するんです。そうでしょ。そりゃそうですよ。二人の世界だから。二人の世界しかないのに、この片方の私たちが、「なんかひどい目にあったんだ」って・・・、誰がやったんですか。もう一人の相手しかいないじゃないですか。書こうと思えば、そうしか書けないじゃないですか。

でも、神様の方としたら、「二人の世界だったのに、でも、出て行くんだったら、仕方ない」と。背いて二人の世界から出て行こうとする人を、「もう、出て行って、第三者に任せるしかない」と。外に居る悪者どもがその人を虜にしていくのを見て、「第三者に任せるしかない」と、・・・神様の方では、そうじゃないですか。だから、実在しているけれど、サタンのことをあれこれと、ここでは、まだ言わない、書いてないんです。

ここで、何を「第一」にしたかったかというと、あなたと神様の『神の御国』なんです。その中に楽しんでますか、その中に憩うことができるか、ほんとに、我々が神様の向かい合った時にそれをきっちり、享受出来ていけるだろうか、ということが、大事なんです。まだ、「サタン」が、どうのこうのというときじゃない。「律法」がどうのこうのではないんです。何の規則も誰もいない「主と私の二人の世界に、私たちが、憩うことができるかどうか」・・・そういうことなんです。

だから、私たちが、「礼拝に出た」と言っても、前の週から、先月から、「人生の後ろ」をいっぱい引きずって、礼拝に出ていますから、・・・そうでしょ。　そして、いろいろ、あの人のこと、この人のこと、家のこと、仕事のこと、もういっぱい、引き連れて、我々は、礼拝に出て、その中にいますから、礼拝に来ても、あの人のこと、この人のことが、いっぱい気になるんです。

でも、そんな状態で礼拝の中に、我々がいるというのは、勿体ないです。本当は、自分と神様との中に、とっぷりと、憩い楽しんで、いく自分がその中にあって欲しいんです。この世の中の人はもちろんですけれども、クリスチャンだと言っても、もう、あまりにも、いっぱい引き連れて、立っているでしょ。でもね、我々が、いつも、朝に昼に夕に、どこに立ち戻るべきか。この初めの「神の国」に立ち戻らないといけないんです。そこに神様は、門扉を開いて待っておられるんだということです。

初めにうたった「今、目覚める者よ」の歌詞を一緒に読みましょう。後で歌います。

今、目覚める者よ　我が内にありて　喜び楽しみなさい
古きは去りて　新たなる世界　衣を脱いだ　新たなる世界
アルファであり　オメガである　主が　ここに　おられる

主が言われています。今、目覚める者よ　今、神の国に目覚める者よと。

今、目覚める者よ　我が内にありて　喜び楽しみなさい。
主の臨在なる、新たなる世界　永久に替わらぬ　新たなる世界
有って有る者、永遠の名　主が　ここに　おられる

今、目覚める者よ　我が内にありて　喜び楽しみなさい
愛に満ちた　新たなる世界　光に満ちた　新たなる世界
無から有を　生み出される　主が　ここに　おられる　　アーメン！

東京キングダムセミナー②20221112

後半　　賛美

賛美の歌詞のように、神様は、「創世記の最初の神との世界の中で喜び、楽しみましょう」と、神様の世界に招いておられるんです。「神様の国は、どこにあるの？　そこにあるの？」と、考えるより、真っ先に、です。そういうことです。

すべての私たちの行為よりも先に神様が、神様の世界を造り、そこに存在して、あなたをそこに招いて下さっている。招待して下さっているんです。現実に神の世界がそこにあったんです。我々が、それに心を開くことだけで、その世界の中に我々は存在できる。この始まりがあって、人間の失敗があり、背きがあり、もう色んなことがあって、苦難がやって来る。そして、それを元に戻すために、神様が手を下して下さった。ひとり子を送って下さった。十字架と復活を通して、聖霊の充満をくださった。さあ、「御霊を受けた」というところまで来た今の時代の私たちが、じゃあ、クリスチャンになって、どこに戻るべきなんですか。一体、どこに戻ったら良いんですか。どういう状態に戻ったら良いんですか。どうなったら、良いんですか。**一番、最後の戻るべきところが分かんなかったら、途中も判わからなくなるから、それって、とても大事です。**

私たちは、神様によって造られたことが１章に書いてあります。その１章の中に、先程話したような「動詞」が、いっぱいが出て来るんです。「ベレシート」のヘブライ語の対訳の１枚を渡しましたけれど、単に、つらつらーと、書いているわけではないんですよ。いいですか。

３節「**そして言った神は、「光があれ。」すると光があった**」４節「**ヴァヤル、エろヒーム　エット　ハオール　神は見た　その光を**」と、書いてある。たったそれだけのことなんだけれど、この「**バーヤール**」という言葉に、非常に抑揚がつけられて、歌われてきたんです。（朗誦）「**ヴァ、ヤーール、エろヒーム♪**」たった、「見た」と言うだけのことを、そんなに言う必要があります？・・・だけど神様は、そうなんです。「そんなに歌う？」って言うくらいに、オーバーに歌われるんです。

我々は普通に、「神はその光を見た」と言うんですけど、これを日本語でやったら、**「神は見たー、あーあーあー。その光ーをー♪」と、「見た」を強調しているんです。同じ動詞でも、こうやって、そこに込められた息づかいが違うんです.**

「神様は、『光あれ』と言って、光があった」それを、我々から言わせたら、神様は、それを見ただけですよ。見ただけなのに、・・・「なによ、その見方」と言いたくなるくらい、「神は見たー、あーあーあー。」と歌われたんです。

どんな見方ですか。（笑）で、**そんなところが、この創世記の中にいっぱいあるんです。**１章、２章、３章に。だからね、歌えなくてもいいから、そういうふうに書かれているということを、頭に入れて読んでみたら、同じ読んでも自分の中で、心が弾むでしょ。ゆっくり読むんですよ。日本語でいいから。「**その後、神は、「光」・「闇」・を「分けた」。それから、神はその光を「昼」と呼んだ。闇を「夜」と呼んだ。**」と、**淡々と、無感情で、無感覚で、書いているわけではないですから**、いいですか、この調子で、他にも、例えば「『良し』とされた」それから「祝福した」など…動詞が、いっぱいあるでしょ。

皆さん、家の台所で、おいしい物を作りますよね。例えば、グラタン作る。そば作る、うどん作るじゃないですか。・・・私も作りますよ。はい、焼きそばを作ります。もう、いろんな物を作って、作って、ラップかけてしまって、あるいは冷凍して・・・って、やるじゃないですか、その後で、皆さん作ったものを祝福しますか？　おお、うなずいていらっしゃる方がいる。「ハレルヤ！祝福するんだ！素晴らしい！」そうですよ。**作ったものを祝福しましょう。**この気持ち、ど

うですか。神様は、造ったすべてのものを「良し」としたんです。祝福されたんです。そういうお方なんです。スマホだったら、もう、バンバンバンバーン！と、「Good」ボタンを押しまくりじゃあないですか。(笑)・・・もう、「Good」「Good」で、祝福なんです。
創世記 1：22 にあるこの「**祝福する**」って言葉、これも、(朗誦)「**ヴァイエヴァレフ**」(ヴァーィエヴァ　レフ♪)というんですけれどね、　(朗誦)「ヴァイエヴァレフ」(ヴァー　エヴァーー　レフ　オ　タマーーーム♪)と、**めちゃクチャ喜んでいる。小さな子供たちが、何か出来たら、「わーい！できた！出来た！」って大人に見せに行くじゃないですか。「見て、見て、みてー」って。あれですよ。**本当に、祝福しておられるんです。

だからね、聖書の第1章なんかを、静かな世界で、・・・非常にこう静かに、動きなしに、スタティックに読んできたじゃないですか、そうじゃないですか。だけど、本当は、めっちゃダイナミックであり、めっちゃ躍動感があるんです。**それが、神とあなたと万物との「神の世界」なんです。**

神様って、なんか、ムスーッとした顔で、こう造って「良し」と言って、「祝福した」って、淡々と言いているような、なんか、たいして反応しないでいる日本の昔からの親父さんのイメージじゃあないですか。ぶすっとしたお父さんのイメージが、いっぱいありませんか。褒めもせず、喜びもせず、「お父さん誕生日よ」と言って、プレゼントあげたのに、「ああそうか、うーん、これとこれだけか」っていう。そういうイメージが、「天の父」にあるとしたら、とんでもないですよ。**ダイナミックで、躍動感があって、本当に楽しそうな、それが、天の父。いっぱい私たちを見ていてくれる。そうして、「良し」と見ていてくれる。祝福してくれる。「そのような父ですよ」と言ってるんです。**

それでね、1章の最後の方に、「万物が出来て、いよいよ、人を造るようになった。」と書いてあるよね。いよいよ、人が造られるんです。「それまで、私、いませんでしたよ。」って考えで人間は読むんです。私だってそうです。そうなんですけど、「初めに、神が、天と地を造られた」って、「初めに」って言う時に、聞き手である、私たちが、そこにいるんです。**語り始めたのは、あなたが居るからです。私たちが居るからです。聞き手であるあなたに、神様が、ゆっくり、語り始められたんです。そうでなかったら、意味がありませんよ。神が語った言葉には、絶対、聞き手がいるんです。**そして、「万物が出来始めていよいよ、人を造るようになった。」と、言うのを聞き手である私たちが、聞く時、「おお、来た、私の番だ！」と、思うわけなんです。ハイ。

そして、26節、「神は、我々に似るように、我々の形に人を造ろう」と言われたんです。ここのところは、この前の回で言ったけれど、・・・なんで複数形で「我々」となっているんでしょうか。これも大きな2つの説があって、1つ目は、「天の神とか、お偉い方に対しては、複数形を使うという、**「尊厳」・「畏敬」の複数形**」だという説です。これは、文学的に、学門的にそうなっているんです。それもそうかもしれない。けど、聖書の理解から言うと、前にも言いましたけれど、神様は、交わりの神なんです。**神は、お一人、唯一なんです。「アドナイ　エろヒーム」は、「エはッド」、一つなんです。けど、神は、「交わりの神、共同体の神」なんです。**この二つのミックスな人間の頭では分からない、3 次元の頭では分からない、でも神様の世界では、そうなんです。それを我々は、分からないから、「ハイ、駄目」と言って、バサーっと、捨てたくなるけど、そうじゃない。**「いつか我々にも完全に理解できる時が来るだろう」と信じて、我々は、それを受け取**

るんです。
「神は、交わりの神であり、共同体の神」なんです。
「エろヒーム」と言う神の言い方も、複数形なんです。単数形は、別に「エロハ」という単語が、あるんです。「エろヒーム」と、なんで複数形でわざわざ呼ぶのでしょうか。そこに、ものすごい奥義が隠されているんです。「我々の関係性に似るように」というのは、共同体の我々に似るように、あなたも造ろうと、言っているわけです。だから、もう、そっからは、神様は、たった一人の世界じゃないよ。共同体を想定しているよ。」と言っているんです。

そして、何のために造ったかが、書いてある。(1：28)「海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」と言われた。宇宙のもの、世界のものをいっぱい造っておいて、その後に、人間を造って、「それを支配せよ」と言っているんです。人間の立場ってなんですか。神様は人をご自分のパートナーとして、ご自分の、いわゆる「分身」のようなものとして人を造られた。そして、すべての被造物を「治めるように、守るように、支配できるように」造ったんです。この目的は、非常に大きいんです。
案外、ここのことが、クリスチャンの世界で、軽んじられている。「なぜ？」・・・まぁ、私がこの話をし始めたら、長くなるので、・・・ちょっというとね、「海の魚、空の鳥、家畜、地をはうすべてのものを支配せよ」と、書いてある・・・、この「地をはうすべてのもの」って書いてあるけど、「後に騙されたのは、誰から騙されたんですか？」　3章で、「地をはうものがいます」よね。地をはうものを治めるべき人間が、逆に、地に這うものに「治められていってしまう」ということ。じゃあ、・・・それは、あの時だけですか？
人間を支配しようとするものを、黙っちゃいませんよ。継続して人間を支配するように、あの手、この手で、誘惑しているのです。それに対して、我々は、「どうやって、治められずに、治めるようになれるのか」と言うことを学んで、成長していかなければならない。残念ながら、3章の時のアダムとエバには、それがなかったんでしょう「なんで？何が足らなかったんでしょうか。」そこをじっと見ていくことで、我々は、同じ過ちをもう踏まないようになれる訳でしょ。

27節、「神は、このように人を自身の形に創造された。神の形に彼を創造した。男と女とに彼らを創造された。」と書いてある。ここには、男が先だとか、なんとかと書いてないんです。「人」というのは、「ハアダム」です。男と女って言うのは、別の言葉です。「人」を造ったんです。そして、その後、その「人」を男と女とに創造したんです。
それで、このところで、ちょっと言わしてもらうと、ここも2つの解き方があるんです。
「神はこのように人をご自身の形に創造された」と、書いて、そして、その後に、また、「神の形に彼を創造し」と、書いてある。重複して書かれています。これを、「強調したんだ」という取り方と、もう一つは、実は、原文で見ると、(原文で見れる人は、どうぞ、見て下さい。)「人をご自身の形に創造された。」という、「ご自身」ということばは、ありません。なんて書いてあるかというと、「人を彼の形に創造された。」と書いてある。神様は、このように、「人を彼のように創造された」と書いてある。この「彼の」って書いてある「彼」は、誰のことですか？　神様のことですか。「神は、このように人を彼の形に創造した」と言っているのは、神様のことですか。神様に似せて造ったんだから・・・、「神様の形」という解釈と、「人をご自身の形、・・・じゃなくて、彼の形だから、「アダムの形」に彼を創造したんだ」と、読もうとしている人たちもいるんです。

つまり、「神の形に似せて造ったけれど、それだけじゃなくて、人を「アダムの形」、「アダムという固有の形」に造ったという解釈があります。人の「固有性」を神様は、大事にしているのだ」と、言う読み方もできます。

そして、28節、「**神は彼らを祝福された。**」このように神は、仰せられた。「**生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従え。**」はい、出てきました。「**海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を・・・支配せよ**」と。これは、ハッキリと、26節とまた、**重複して書いてある。厳重に受け止めなければならない。**そんなにね、「海の魚って、空の鳥って、地をはうものってさ、従わないの?」「好き勝手に生きているように見えるけど・・・。」それで、「神様は、ここで何が言いたいの？」「従えっていうけれど、・・・深海に住んでいる深海魚をどうやって、従わせるのよ。空を飛んでいる、あんな高いところを飛んでいる鳥たちをどうやって従え、服従させるんですか。」と、そう考えると、突っ込みどころ満載なんですけれど、・・・でもここは、物理的な理科的な、どうのこうのという、それを世話をして、増えすぎないように、絶滅しないように、ということが・・・あるかも分かんないけれど、それだけじゃない、**目に見えない霊的存在がいることを想定しています。**

「ルシファー」という単体の存在だけじゃあなかったんです。もちろん、その手下に、無数のもろもろの霊力が、あったわけでしょ。1個1個、主だった個性的なものを上げてみたいですか？ぞっとするよね。皆さんも色んなことがあったと思いますけれど、我々は、そういったこの世の中にいる物質の世界のことは勿論のことですけれど、その物質の世界を用いて、その背後に迫って、人間に働きかけようとして、「神の国を、己が国にしよう」とたくらむ諸々の霊力に対して、我々は、人はね、「従いなさい」、「支配しなさい」と、言われている。・・・だけど、これって、「神様が、何でやってくれないの？」「神様がやったらいいじゃないですか。」「大権ふるって、全能の神ならば、「もう、お前ら、邪魔しおって、うるさいぞ。」と、ビシーッと神様なら、大権ふるってやったら、それで終わるのに・・・」、だけど、その戦いを、神様は、世の終わりまで、天地が新しくなるまで、誰とやろうとしているんですか。

クリスチャンなら「主イエス・キリストが、完全に勝利したんだ」って、知っている。その勝利を持っているけれど、「相変わらず、吠えたける獅子のように狙っている者がいる。」と、言っている。だから、**私たちは、そこに「目を向ける」、そこに「気を遣う」、それに「打ち勝つようになる」ためにも、初めに啓示されている神の国を知っていなかったら、駄目なんですよ。**

旧約時代に生きた人は、それなりに知っている。でも、イエス・キリストの時代に生きた人は、もっと知っている。イエス・キリストの十字架の贖いを知って、勝利を知っている。生きている神の時代、そして**神の国が完成しようとしているこの「パルーシア」の時代**に我々は、もっと、それを知るようになる。もっと、出来るようになっていく。という希望があるし、そこに任命があるんだと。で、それらがね、「造られたものが、非常に良かった」って言って、それで、6日目が終わって、第7日目、これについては、前回お話しましたよね。6日で全部終わっているのに、何で、「7日目に完成した」と言っているのかを。業を休まれて、完成したんです。**完成の中にも休みが入ったんです。**人間が第6日目に造られて、一晩経って目覚めて、第一日目、「さあ、何をやろうか」というのではなく、休んだんです。**神の中に安息したんです。御国の中に安息できなかったら、これから治める業は出来ません。**

それから、2：4節からは、また、画面が変わっていく。「**これは天と地が創造されたときの経**

緯である。」と。皆さん、次これ注意です。「**神である主が地と天を造られたとき**」・・・「地と天」になっています。いいですか、「天と地」と言ってませんよ。ここでね、カメラポジションが、ビシッと変わったということが分かります。

5節「**地にはまだ一本の野の灌木もなく、まだ1本の野の草も芽を出していなかった。**」・・・これは、1章の描写には、そういうのがありません。これはね、地を造られた地のありさまと、今度、人が造られていく有様を、グーっと、ズームアップしています。そいう感じです。

その後、2：7節「**神である主は、土地で、人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生き物となった。**」他の動物達にいのちの息を入れることなく、人は、「**神が、土地のちりで人を造り、それにいのちの息を吹き込まれた。**」8節「**神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。**」9節「**神である主は**・・・これ、エデンの描写ですね。・・・**その土地から、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。**」云々と、続きます。ここから場面が、四つの川の話になります。この「エデン」というのが、単に一つの孤立したものではなくて、「**全世界の中に祝福と潤いをもたらす元になったものだ**」ということが「四つの川」で、分かります。で、15節「**神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、そこを守らせた**」と書いてある。こういうところが、大事です。エデンの園にいたからってね、龍宮城状態じゃあ、なかったんです。それってさ、口開けときゃ、木の実が落ちて来るって、そーんなんじゃないでしょ。ちゃんと、エデンの園でね、やることがあったんです。忙しかったんです。耕し、守るという。耕すというのは、たいそうな世話でしょ。土地を発展させる。切り開いていく。で、そこを守らせる。何から守るんですか。守らなければならない、何がしらがあるわけです。

16節、**神である主は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べて良い。**」・・・これはね、どの木からでも「大いに食べろ」と言ってるわけですよ。ところが、17節「**善悪の知識の木からは、取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは、必ず死ぬ。**」と。不思議だよね、この言い方。前回、ここのことをいろいろ詳しく言いましたね。

その後、18節、**神である主は仰せられた。「人が、一人でいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい、助け手を造ろう。**」って、なんで？一人でいるのは良くないんですか？寂しいから？つまんないから？「**この善悪の知識の木の実を取って食べる時、あなたは、必ず死ぬ**」と言われた直後に、「**人が一人でいるのは、良くない。**」と言われたんですよね。人間のポジションとして、きわどい時に「彼にふさわしい助け手を造ろう」と、言われたんです。神様は、一つの共同体として、守ろうとされたんでしょうか。

だけど、もっと不思議なことがある。だからと言って、すぐにエバを造ったわけじゃないでしょ。19節に、「**あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造った。**」と言っている。そして、「**それに、どんな名を彼がつけるかを見るために、人の所に連れて来られた。**」と言っている。「**人が生き物につける名は、みな、それがその名となった。**」・・・「なんのことよ」と言うことですよ。で、ここで大切なのは、今まで名前を付けたのは、神様ですよね。神の行為だったんです。・・・だけどここに至って、それを、神様のパートナーとして、人に名前を付けることをさせているんです。つまり、神様の行為を、神様の王権を、アダムに使わせるために、生き物を連れて来たんです。そしたら、彼がつけた「その名が、そうなった。」んです。

神様は、「いや、その名は、まずいよ。」とは、言わなかったんです。「いくら、アリが好きだからって、アリクイはないだろう。」と。（笑）これは、日本語ですけど・・・、そういうふうなことを言わないで、**人が、つけた名が、その通りになった。**」んです。

ところが、人に名前は、つけさせたんだけど、神様は、どうだ、この中にお前の「**エゼル　ケネクドウ**」向き合う助け手がいるかとは言わないで、人には、「エゼル　ケネクドウ」向き合う助け手が、見つからなかったと書いてある。これは、人の判断ですよ。神様の判断じゃあないよ。人の判断を神様は、推奨したということになります。みんなすべて、神様が、ああだ、こうだと、押し付けているんじゃあないんです。人の判断を神様は、尊重したんです。21節そこで神様はその人に「**深い眠りを下された**」んです。「**彼は眠った。**」「**そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた**」と書いてある。皆さん、女性の皆さんは特に、「そんな、男のあばら骨で造られたんじゃあありません。」と、言いたいかも知れませんが、ここで「**人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、・・・。**」とありますが、この「女を造った」という単語は、普通に、神が創造したという「バラー」とか、他の単語じゃあないんです。このときに「造った」というのは、いわゆる職人が技術を込めて、細かく仕立て上げる、造り上げられるという単語をわざわざ使っているんです。男を造った、人を「初めに造った」という「造った」という単語じゃあなくて、女だけが別の単語が使われているんです。だから特別に、神様は、力を入れて、技術を駆使して造ったのが、「女」ということです。どんなんですか。女の人って。

23節、すると、「**人は、言った。これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男からとれたのだから。**」この時の「男」、・・・「女」が取られたんだから、残っているのは、「男」だよね、・・・この男の「この叫び」って言うのは、また凄いの。もう、大声あげて、ハッキリ叫んでいるんです。スタティックに、静的、静かに言ってるんじゃないんですよ。「**女と名つけよう。これは、男からとられたのだから**」って、なんのこっちゃって、思うけど、ヘブライ語で、「イーシュ」というのが男で、「イシャー」が女です。だから、ヘブライ語で「イーシュと言ったから、イシャーですよ。」と、語呂的に言ってるだけなんです。

だけど、その次の24節「**それゆえ男は、その父母を離れ、妻と結び合い、二人は一体となるのである。**」と、書いてある。この時のアダムとエバには、お父さんとお母さんがいたんですか。いませんよね。だから、いかにこの創世記のこの記事が、いわゆるシンボリック、象徴的というのがよく分かりますよね。お父さん、お母さん、いないんだから、わざわざ、「離れて」って、書いてあるんですけど、・・・ちょっとそのまま書くと、こういう字ですよ。（ホワイトボードにヘブライ語を書かれる。）

これが、男です。これが女です。これが夫。妻。こっちを「イーシュ」(אִישׁ)（男）と読みます。こっちが、「イッシャー」(אִשָּׁה)（女）」と読みます。「イーシュだから、イシャーですよ。」と、こういう語呂になるわけです。昔からね、こういわれているんです。男に、これと、これと、これと、3文字なんですね。女に、これと、これと、これと、3文字なんです。男にあって、女に無い文字があるでしょ。女には有るけど、男に無い文字があるでしょ。ありますよね。何ですか。41：28.37 男にあって、女に無い文字は「ユッド」(י)で、女には有るけど、男に無い文字が「ヘー」(ה)という文字です。男と女が一体となることで、この2つの文字が合わさって（יָה）「ヤー」という文字がそこに存在するようになります。この(יָה)「ヤー」という文字は、「神様」という意

味なんです。＊神聖四文字(יהוה)の略した形で、「主」という神の固有名詞です。
「ハレルヤー」の「ヤー」は、「賛美せよ　神を」の「神様」のことです。分かりますか。そうなんです。だから、男と女が、一つになると「(יָה)ヤー」が現れると、・・・「ヤー」という文字がそこに存在するようになります。

夫と妻が、結婚して１つになると、そこに「神」が現れます。一致すればの話だけど・・・(笑)
「神様はそんなふうな気持ちで付けたのかな？」と、太古の昔から言われていることなんです。いいですか、この二つの文字が、男と女が一体となって、一つの肉となった。だけど、この「ユッド」(י)と「ヘー」(ה)という文字が無くなったらどうでしょう。これとこれがない、・・・すると、この文字(אֵשׁ)が残りますよね。この文字は「エーシュ」と読みます。「エーシュ」(אֵשׁ)は、「火」という意味なんです。もし、夫と妻の中に「神」がいなかったら、「火」ですよ。(笑)。ね。
「いやいや、ちょっと待ってくださいよ。」そんなこと言ったら、この世の中、ほとんど、もう、大火事ですよ。そういうことになっちゃうじゃないですか。そんな完全な男も女もなく、でしょ。だけど、こういうことです。皆さん。(笑)

「イシャーとイーシュが、一つの肉体となった。」と、聖書が言っている。くっついた一つの肉となったと。一つの肉体の中に、例えばですよ、女の方に「ヤー」(יָה)の片方である「ユッド」(י)がない。じゃあ、そのことを心の中で、意識している妻は、「ヤー」(יָה)の片方があるわけですよ。こっちがあるんだったら、この妻は自分の片方の「ヤー」を持って、この一体となっている男を、「包め」って、言っているわけです。「なんでー、私だけ大変なのにー」「なんで、あいつの分まで、包まなきゃあ、いけないのよ」と言いたいかもしれませんが、「もう、神の目からしたら、一つとして、造られているから、あなたの「ヤー」が、もう片割れの、もう一つの肉体の方も、あなたの「ヤー」で、聖められ、守られていきますよ。」と、言ってるわけです。
「じゃあ、両方なかったらどうするのよ」って、それはもう、想像してください。
逆もしかり。そうでしょ。「男の中に「ヤー」(יָה)の片方である「ヘー」(ה)が無くっても、「ヤー」(יָה)の片方があるわけですから、男の「ヤー」で、一つの肉体の片方である女「イッシャー」を包んで、支えられますよ。」と言っている。
問題なのは何かと言うと、神から、一つの肉体として造られているという現実を正面から受け止められていないということです。我々が、結婚しても、男と女がね、どっか、「あいつはあいつ、私は私、」と言う感覚がある。もちろん現実の生活の中で、現実そうなんだから、・・・別の肉体なんだからそうなんだけど、・・・霊的な神の国の中の根源として、一つに造られているんですよ。神が見て「祝福している」ということを、我々は、すったもんだする現実生活の中で、腹の中で、どっかで、受け止めてないといけない。それが、信仰を使うということになるんです。

いいですか、これは、夫婦のことのように書いてありますけれど、神は共同体の神です。夫婦の形で取っているけど、夫婦以外の兄弟姉妹の関係もそれに準じて、同じです。教会の兄弟姉妹もそう、みんな、我々は、一つの共同体の中で造られている。神は共同体の神、交わりの神です。みんな、ずたずたにブチ切れた個人、個人ではない、集合人格だと、キングダムセミナーでは、何回も言っているのは、そこです。神様のそれがみこころなんです。捉え方なんです。

だから、この神の共同体が、初めに造られた時、「人とその妻は、互いに裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。」と書いてある。完全じゃないですよ。出来上がっているわけじゃないわけです。みんなね、まだまだね、発展途上であり、未熟なところがいっぱいあって、これからも造り上げられていくという、これからの成長の伸びしろが、いっぱいあるんです。

でも、ありのままの男も女も兄弟姉妹も、自分に「劣等感」や「欠乏意識」があるならあるで、いいんです。それは、満たされていくから、いいんです。神の国に入れば、「そのままの状態」で、喜び、楽しむことが出来るんです。我々は、「あっちがダメ、こっちがダメ、これが出来てないんだ、これを知らないんだ、あれがこうだ、ああだ・・・」と自分のことを思い、今度また、人のことを「あの人はこうだ、ああこの人はこうだ」と言って、判断したいんです。ほんと、そういうふうに判断したいんです。そういうふうになった時の3章、また次回、また、詳しくやりますけれど、3章は、問題です。何で、3章であんなことになっちゃたのか、その片付けとしてどうなのか、ということです。

だから、「私たちは、何を治めるべきなのか」ということが、いっぱい見えて来る。だから、「救われたから、天国に行けるから、ハレルヤ」って、「いつ軽挙があっても大丈夫です。ハレルヤ」って、そうなんですけど、神様の我々のプログラムは、それだけでしょうか。

この世の初めの神様の国を神様は、完成したいと思っている。「誰と？」我々一人一人と。男と女とで。みんなで具体的に治めるべきものを治め、私たちが、裸であってもなくっても、恥ずかしくなく、伸び伸びと、神の国を楽しんで、それを築きあげるということを、神様は、今喜んでしようとされているんです。そういう時代が、今、もう、来ている。我々の目を開かんとしている。今、目が開かれている。この時代にね、目が開かれようとした人は、みんな責任がありますよ。

20年前30年前、私がこのキングダムセミナーを始める時、ホントに、反応がなかったです。「ポカーン」としているから「そんなに難しい？」って聞くと、「はぁー」って、・・・そうだったんだから、あっちこっちで、・・・新宿でやった時も、もう、男の人は、こうやって、「そうですかー」って、・・・もう、私も失意落胆しました。・・・でも30年たった今、通じるんですよ、こうやって。これは何なんだろうかと、つくづく思います。で、そういう時代が、私たちに来ている。今来ている。もう、それが理解できる時代になっているわけです。主がそういうふうに語っておられるわけです。御霊を通して、いっぺんに、パーと広がるなんて、そんなことは思っていません。でも大切なのは、語り始めること。宣言し始めること。だから、私が30年前にやったことは、無駄じゃあなかったと思う。誰も読まないのに、ワープロにぜーんぶ書いてさ、「誰が読むの？これを・・・」と思いつつ、忙しい中でも書かざるを得なかった。ダーーと書いてプリントアウトしていたんですよ。そんなことを今思うと、主があっちこっちで、語られ始めているんだと思うし、それを聞いてみんな「食べられる、消化できる時代」になっているんだと、思うんですよ。ハレルヤ！はい、もう時間ですね。　　・・・質疑応答あり・・・